

歴史は未来の羅針盤



これまでに刊行しました『近江日野の歴史』は、第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第三巻「近世編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第七巻「日野商人編」、第八巻「史料編」となりました。教育委員会や各公民館などにおいて、一冊四、〇〇〇円で好評販売中ですので、ぜひともお買い求めください。

今回は、『近江日野の歴史』第三巻「近世編」の中から、江戸時代の生業について紹介します。

### 村明細帳と大窪町

江戸時代の日野には、市街地を成していた町場、街道沿いで宿駅がおかれていた村、純農村などが見られます。当時は、家数、人口、生業（職種）などを詳細にまとめた「村明細帳」が町・村ごとに作成されていました。ただし、そこに記載されているのは戸主の生業であり、例えば、農家の二男が商売をしていても、その家の生業は百姓であるなど、村明細帳が必ずしも実態を正確に反映しているとは限らない点に注意が必要です。現在、村明細帳はいくつか残されていますが、生業の様子と推移がよく分かる事例として、町場の一つである大窪町を取り上げます。

大窪町の明細帳には、①正徳二（一七二二）年、②元文三（一七三三）年、③文政八（一八二五）年の三

点があり、百年以上の経過の比較が可能です。

大窪町の生業や家数、人口は、下表のとおりです。家数は約八百〜九百軒で増減していますが、人口は四千人超から三千人以下となり、千人以上（約三割）も減少しています。この間には享保の飢饉（一七三二〜三三）や天明の大飢饉（一七八二〜八七）があり、このことが影響しているのでしょうか。なお、日野市街地の大半が焼けたといわれる宝暦六（一七五六）年の大火では、大窪町の焼失民家は七八〇軒と記録されており、明細帳からもこの数字がほぼ裏付けられます。

### 大窪町の生業

日野を特徴づける生業として、商人と塗師に注目してみましよう。

商人には、他国商人（日野商人）と担売商人（地商い商人か）がいました。①では三八〇人と約八〇

人、③では四二二人と約九〇人で、いずれも約一割の増加です。なお、②が①③と比べて数値が低いのは、②が軒数表示であり、①③が「子供・手代」を含む人数表示だからだと思われます。

日野商人の主力行商品であった日野椀を製造した塗師は、①九〇軒から約二五年で②五五軒と半減し、③では八軒にまで激減しました。同下職人も、①三〇〇軒から③二二軒と一割以下になっています。

他国商人と塗師（下職人等を含む）の職種構成比率を見てみましょう。他国商人は①九・三%から③一四・三%と増加しています。これに対して、塗師は①四五・五%から③三・七%と、全戸数の半数近くから激減しています。

商人が増加するなかで、衰退する日野椀に代わって、主要行商品となったのが売葉です。その代表が、初代正野玄三が正徳四（一七一四）年に創製した萬病感應丸です。正野家の純資産

年代	生業（軒数、人数）	総件数・人数
① 正徳2年 (1712)	医者(9軒)、外科(2軒)、目医者(1軒)、針医者(2軒)、山伏(1軒)、安摩(1軒)、座頭(1軒)、塗師屋(90軒)、他国商人(380人余)、塗師下職人(300軒)、大工(12軒)、鉄砲鍛冶(6軒)、農鍛冶(1軒)、鉄砲金具屋(1軒)、鉄砲台屋(2軒)、左官(2軒)、担売商人(80人程)、費用取(70人程)、指物屋(5軒)、桶屋(7軒)、酒屋(8軒)	857軒 4,100余人
② 元文3年 (1738)	百姓(71軒)、大工(18軒)、鉄砲師(4軒)、野鍛冶(3軒)、酒屋(5軒)、塗師(55軒)、諸職人(267軒)、商人(225軒)、木地・漆問屋(1軒)、日傭(17軒)、医者(15軒)、外科(3軒)、酒屋(8軒)、目医者(2軒)、按摩(5軒)	905軒 3,657人
③ 文政8年 (1825)	医者(5軒)、目医者(1軒)、外科(1軒)、按摩(1軒)、塗師屋(8軒)、塗師屋下職人(22軒)、他国行商人(422人)、大工(26人)、鉄砲鍛冶(2軒)、鉄砲台屋(1軒)、鉄砲金具屋(1軒)、農鍛冶(3軒)、左官(2人)、担売商人(90人程)、日雇(100人程)、指物屋(10軒)、桶屋(9軒)、酒屋(4軒)	810軒 2,942人

\*表記は史料のとおりです

推移をみると、享保二（一七二七）年が最高額を記録しています。ちようど塗師の減少すなわち日野椀衰退が始まりかけた時期と重なってきます。このように、村明細帳は多くの歴史的情報を与えてくれる貴重な史料なのです。